

Time in T.S. Eliot's Four Quartets(T.S. エリオット『四つの四重奏』における時間)

山口, 敦子

<https://hdl.handle.net/2324/1500463>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	山口 敦子			
論 文 名	Time in T. S. Eliot's <i>Four Quartets</i> (T. S. エリオット『四つの四重奏』における時間)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	鵜飼 信光
	副 査	九州大学	教授	太田 一昭
	副 査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副 査	九州大学	准教授	武田 利勝

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、米国出身で英国に帰化した詩人 T. S. エリオットの後期長編詩『四つの四重奏』(1942年)を、その作品の中核をなす「時間」の主題を軸に研究したものである。エリオットの作品の中でも『四つの四重奏』はとりわけ難解な作品であるが、本論文は、先行研究をよく吟味し、プラトン、アウグスティヌスなどの思想家、ウェルギリウス、オウィディウス、ダンテなどの詩人からの影響も視野に入れながら、作品が描く人間の有限な時間と神の永遠の関係について、独自の意義深い解釈を提示している。

本論文は『四つの四重奏』を構成する四つの詩篇をそれぞれ一章ずつで考察しているが、第一章は、現在の意識の中に過去と未来が統合されるとするアウグスティヌスの時間論と時間を永遠の似姿と捉えるプラトンの時間論を参照しながら、第一の詩篇「バート・ノートン」が、神の愛を通して永遠が垣間見られる可能性を描いていることを解明する。第二章は、第二の詩篇「イースト・コーカー」において、天地創造と人類の墮落という「始まり」から最後の審判という「終わり」へと至る「歴史的時間」の「中間時」(そこで人類は罪の重荷に苦しみながらもキリストによる救済を希望できる)が永遠に接近できる意味ある時間として捉え直されていることを示す。第三章は、第三の詩篇「ザ・ドライ・サルベージズ」に、ダンテの描く帰郷後さらに放浪し破滅するユリシーズ、溺死した漁師たち、聖母マリアへの祈りの三つの物語が織り込まれていて、それらがキリストによる救済の主題へ収斂していることを解き明かす。第四章は、第四の詩篇「リトル・ギディング」において、リトル・ギディング教会が祈りという行為によって、時間への永遠の受肉を象徴する空間(「バート・ノートン」では受動的に垣間見られた永遠が、ここでは主体的な信仰によって内面化される)として描かれていることを解明する。

本論文は『四つの四重奏』の四つの詩篇のそれぞれの特徴を多面的に捉えつつ、しかも、作品全体が、有限な時間の中にある人間が神の永遠に参与する可能性をいかに探求しているかを、一貫して解明している点に、意義深い独創性がある。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。